



「吾が逍遙歌」に思う

八 尋 富士夫 (高校8回生)

わたしは「吾が逍遙歌」が大好きだ。この歌には青春の心が込められている。遠く故郷を離れているせいか限りない郷愁を憶える。

この歌を歌い続けて、青春の心をいつまでも持っていたいと思う。

卒業して半世紀ずうっと歌ってきた。年間少なくとも七～八十回は歌う。特に春・秋が来ると無性に歌いたくなる。

この歌を初めて人前で歌ったのは、確か平成七年のクラス会だ。神湊こうのみなとの「玄海旅館」で。当然六番まで一字一句も違えずに歌った。白土君が「凄い、よう覚えちよったなあ」と。他の級友も口にしながら同感の様子。

恩師伊藤嘉孝先生は、作者の「山井静男」先輩のことをいろいろ話して下さった。

わたしは嬉しかった。名古屋から駆け付けた甲斐があった。クラス会はいいなあと、しみじみ思った。

わたしは何故こんなにこの歌に惹かれるのか?と考えた。自然と答えが浮かんで来た。

歌い出しがいい。西行法師の「願はくは花のもとにて春死なむその如月の望月の頃」。

この名歌を元歌にして「桜の下に春死なん・・・酔はんとすれど術もなし」とくればもうこの歌の虜とりこになってしまう。

「青葉にそよぐ乙女子の・・・飛鳥の古仏に似たるかな」わたしは二番がいちばん好きだ。ここを歌うとき、三年間共に過したクラスの女性や、同期の女性達が目につかぶ。

わたしは奈良やまと(大和)全域の古寺巡りをしている。見目麗しい仏様もたくさん拝観した。

それでわたしはこの二番を自分勝手に解釈して十回歌えば、二～三回は「大和の古仏に似たるかな」と歌ってひとり悦に入っているのだ。山井先輩、御免なさい。

三番と四番これも又いい。空・星・宇宙・象徴等があつて、爽快な気分になる。広大無辺なロマンを感じる。「宇宙の象徴に愕きぬ」この表現は凄いと思う。こちらも驚いた。

五番の「月影青く地を照らし・・・微吟消えゆく穂波川」。素晴らしい。ここを歌う時はいちだんと気分を入れて歌う。一度でいいから、あの川原でこんなシーンを体験したかったなあ、ガラにもないことを思ったりする。

六番は最後を飾るにふさわしく、格調高く語られている。厳きびしさに身の引き締まる思いがする。先輩には、このような烈はげしさもあつたのか。

明治から平成の現在へと歌い継がれている、旧一高・二高・三高等の逍遙歌や寮歌がある。わたしは、この「天下の名歌」と「吾が逍遙歌」を比べても「優るとも劣らじ」と思っている。

要するに「吾が逍遙歌」は、詞を読めば読むほど、歌えば歌うほどに、若き日が甦り、愛しさが増してくる。

「山井先輩!いい歌をほんとうに、ありがとうございます」

